

ロマンチックな ドレスの描き方

—ドレスの構造からデザイン・バリエーションまで—

おまけ特別版

— CONTENTS —

〔西洋近代服の細胞・太腰の謎に迫る！〕 … 3

I コルセットの変遷（16世紀～19世紀末）

II 西洋近代服のシルエットと腰枠の変遷
(18世紀末～19世紀末)

〔女性はいつから、どこでズボンを穿き始めたのか？〕 … 11

III ドレス・リフォーム運動

IV 庶民服について

まえがき

私はアパレル業界で 1976～1981 年の 5 年間、服作り（衣服デザイン、パターン・メイキング、衣服生産）の仕事に携わり、1986 年から武庫川女子大学の専任教員として 17 年間、非常勤講師として 13 年間、通算 30 年間、西洋およびアメリカ服飾史やデザイン画、衣服製作など、理論と実習の科目の指導に携わっていました。大学退職後は、アメリカ服飾社会史研究会を立ち上げ、現在はオンライン服飾講座や著述活動に携わっています。

私のプロフィールにつきましては、濱田雅子著『濱田雅子のアメリカ服飾史著作集カタログ』（NextPublishing Authors Press 2023 年 10 月 24 日発売）をご一読いただければ幸いに存じます。

この度、『ロマンチックなドレスの描き方 ドレスの構造からデザイン・バリエーションまで』（以下本書とします）の監修のお仕事に携わらせていただきましたことを誠に光栄に存じます。ファッショングローバル化は衣服デザインの基礎であり、わくわくする胸躍るモノづくりの基礎的分野であります。わが国では、洋服デザインのためのファッショングローバル化のテキストはたくさんありますが、西洋近代のドレスデザインのためのファッショングローバル化のテキストは稀少です。その意味で、本書はとても貴重な技法書です。服作りのみならず、漫画・イラスト、人物画を描くための技法書としても、とても貴重な指南書であると言えましょう。

本書は、韓国語から日本語への翻訳書ですので、日本人のユーザーの方向けに、西洋服飾史研究者として、補足をしてもらえないかと出版社からリクエストがございました。そこで、以下の 4 項目について、補足させていただきます。読者の皆さんも西洋近代服の細胞・太腰の謎を本小冊子で深堀して、本書に満載のイラストの描き方の技法を学習され、皆さんの目的に相応しい、素敵なお手本を描いてみようではありませんか！

【III ドレス・リформ運動】については、本書の著者が p.142 に、ブルマー・スタイルとして言及しています。また、【IV 庶民服】についてについては、p.155 において、平民、中産階級の衣服として言及しています。いずれもさりげなく触れてはいますが、読者の皆さんにとって、興味深いテーマではないでしょうか。

ファッショングローバル化が急増した時代においては、拘束的な衣服からの女性の解放や民衆の衣生活や生活文化史にも目が向けられることも自然なことだと思います。

III、IVにつきましては、著作から概要を抜粋して、簡潔に紹介させていただきたく存じます。ご興味のおありの方は、濱田の著作、あるいは翻訳書をお読みいただければ幸いに存じます。

西洋近代服の細胴・太腰の謎に迫る！

まず、本書の読者にとって、西洋近代の服飾史は大事な内容になると思います。特に、18世紀から19世紀末の服飾のシルエットの変遷を学ぶことは、創作ドレスを描くうえでも役に立つはずです。なかでも西洋近代服のデザイン画を描くに当たっての大切なポイントは、西洋近代の細胴・太腰のドレスのシルエットを創出するためのデバイス、すなわち、コルセットと下揃え（腰枠）の変遷の歴史を学ぶことにあります。

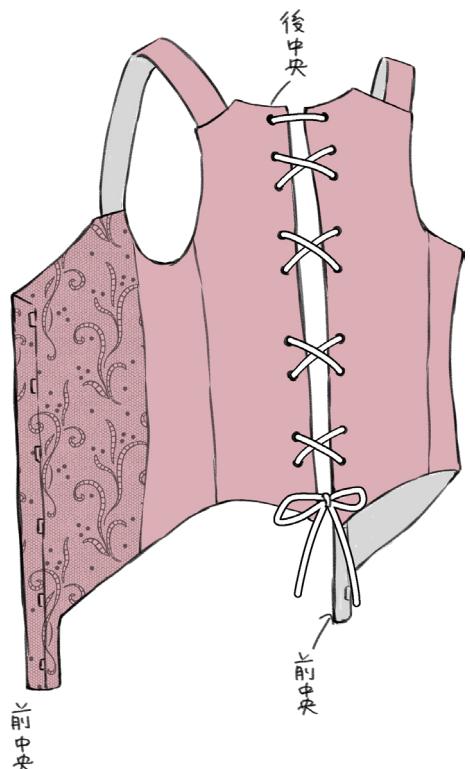
本書では、クリノリンに大きく焦点が当てられています。19世紀のドレスのスカートの下には、スカートを大きく膨らませるための腰枠が装着されていました。ドレスのスタイルは、社会や政治のあり方の変化に伴って、エンパイヤ・スタイル、王政復古調衣裳、ロマンチック衣裳、クリノリン衣裳、バッスル衣裳、ナチュラル・スタイル、Sカーブライン、初期現代衣裳と目まぐるしく変容を遂げていきました。本書では、イラストによってその変容の様相が描かれています。私は西洋服飾研究者として、この変容のあり方を歴史的背景とコルセットや腰枠の特徴と併せて、解説していきます。

I コルセットの変遷（16世紀～19世紀末）

01 ルネサンス期のコルセット⁽¹⁾

西洋でコルセットが装着されたのは、ルネサンスの頃です。すでに、13世紀頃に細いウェストが美しいとされていましたが、その理由は定かではありません。

コルセットの作り方ですが、表布と裏布の間に何枚か芯を入れて刺し、さらに要所要所に鯨骨が張り骨として挿入され、厚みと堅さを持たせていました。このような刺し子仕立ての特徴から、コール・ピケ（刺し子仕立ての胴衣）と呼ばれていました。



ルネサンス期のコルセット（コール・ピケ）
(ロンドン ヴィクトリア・アルバート博物館蔵)

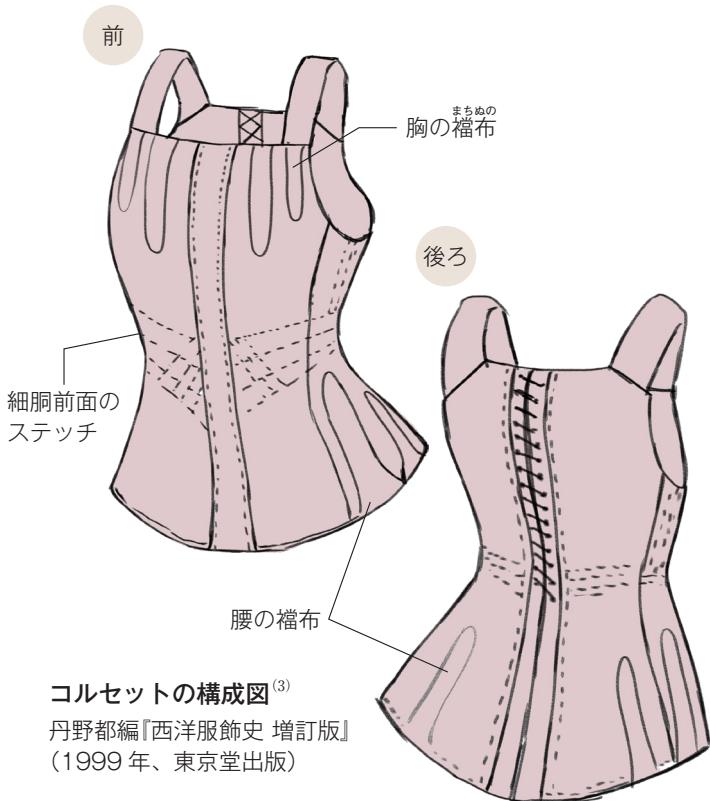
02 ロココ時代のコルセット⁽²⁾

ロココ時代には**細胴・太腰**が美の極致に達したとされています。コルセット作りの技術も著しく進歩します。ロココ時代のコルセットの実物をパリのカルナヴァレ博物館で調査された服飾研究者の故丹野郁博士は、コルセットの特徴について、次のように解説されています。「その妙技は主として、張り骨の数と方向にあったと言われています。胴に鯨髪を密に並べて挿入したり、前中央にバスケットという帯状の張り骨を入れるほか、胴体の丸みにそって曲線に型をついた鯨髪を入れたりしました。……張り骨の数や方向、接ぎ目の具合などによって、製作の年代がわかるとさえ言われました。」（丹野郁編『西洋服飾史増訂版』（東京堂出版、1999、136頁より）



ロココ時代のコルセット⁽²⁾

(▲パリカルナヴァレ博物館蔵)
(▶スミソニアン・インスティテューション所蔵)

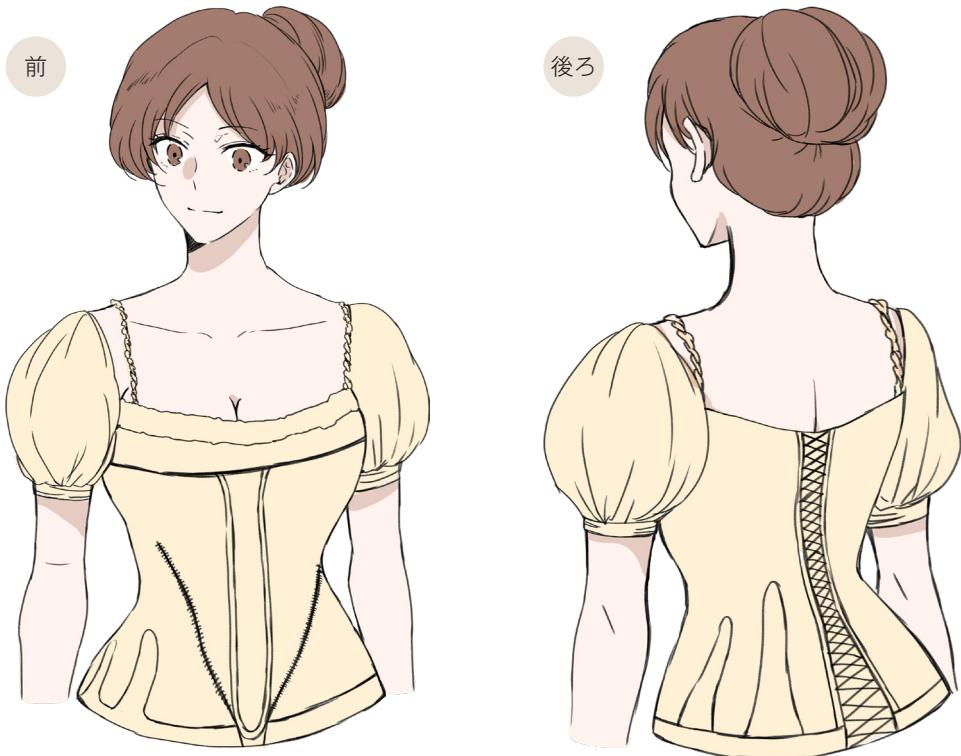


コルセットの構成図⁽³⁾

丹野都編『西洋服飾史 増訂版』
(1999年、東京堂出版)

03 エンパイア・スタイル期のニノン型コルセット⁽³⁾

エンパイア・スタイルのドレスには、もともとコルセットは装着されていなかったのですが、胸から腰のシルエットを整えるために、新型コルセットが1810年代のモード紙に登場しました。このコルセットは**ニノン型コルセット**と言われ、フランス革命前の鯨髪をたくさん入れたコルセットと違って、綿布にステッチだけで堅さを持たせたものです。このコルセットは胸の締め方を工夫したので、身体に優しく、長く用いらされました。

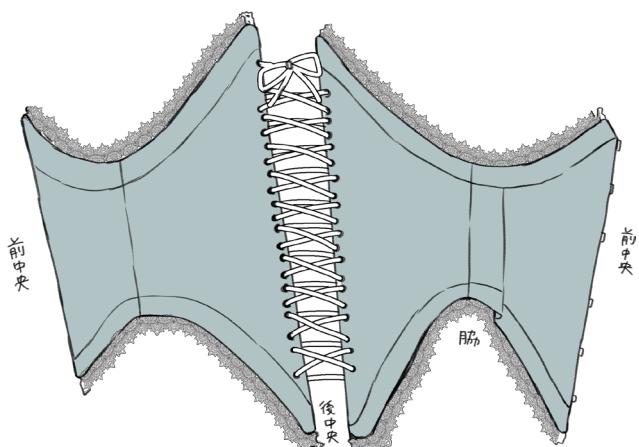


ニノン型コルセット⁽³⁾

胸から腰にかけての長いコルセット腰の部分を広げるために襠布が挿入されている。
丹野都編『西洋服飾史 増訂版』(1999年、東京堂出版)

04 クリノリン衣裳期のコルセット⁽⁴⁾

故丹野郁博士は、ロンドンのヴィクトリア・アルバート博物館で調査されたクリノリン衣裳期のコルセットについて、次のように解説されています。「クリノリン・ペティコートとともに用いたコルセットです。サテン製で上下にレースの端飾りがついています。後中心を紐締めで調節し、前中心（右端）をクリップ留めします。張り骨が前の部分に挿入されているのがわかります。また、前と後の中央で、ウェストラインより下方で整えられていたことが察せられます。」(前掲書、186頁より)



クリノリン衣裳期のコルセット

(ロンドン ヴィクトリア・アルバート博物館所蔵)

05 ナチュラル・スタイル期のコルセット⁽⁵⁾

故丹野郁博士は、第一次世界大戦前のコルセットについて、次のように解説されています。「もともとコルセットの仕立て方には二通りあり、ひとつは乳房や腰のふくらみを形つくるために、三角形の襠布をつける方法（1878年、1885年）と何枚かの布を縦に接ぎ合わせて身体に合わせる方法（1868年）とです。」（文献①、pp.202-203より）

「ガッシュ・サロート夫人創案のコルセットは、当時の婦人たちのあいだで大へん流行しました。そして、細い胴がますますその細さを強調するようになります。このような要求に応じて、前面は強いバスクで平らに圧迫され、乳の部分はコルセットの上端から浮き出すという誇張的なシルエットへと発展し、いわゆるSカーブラインとして知られるシルエットを現しました。」（文献①、pp.204-205より）

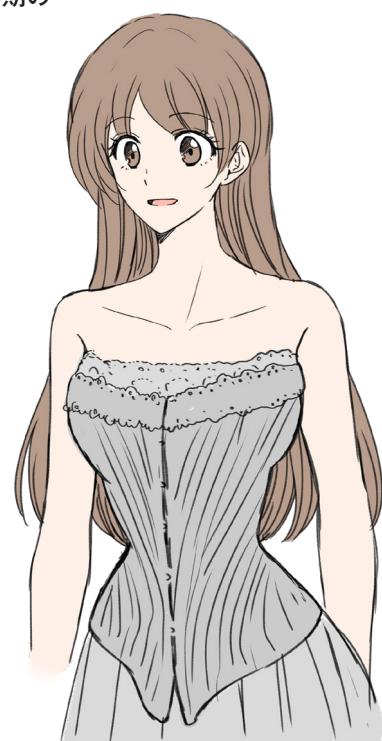


白ズック布製

ナチュラル・スタイル期の
コルセット3種



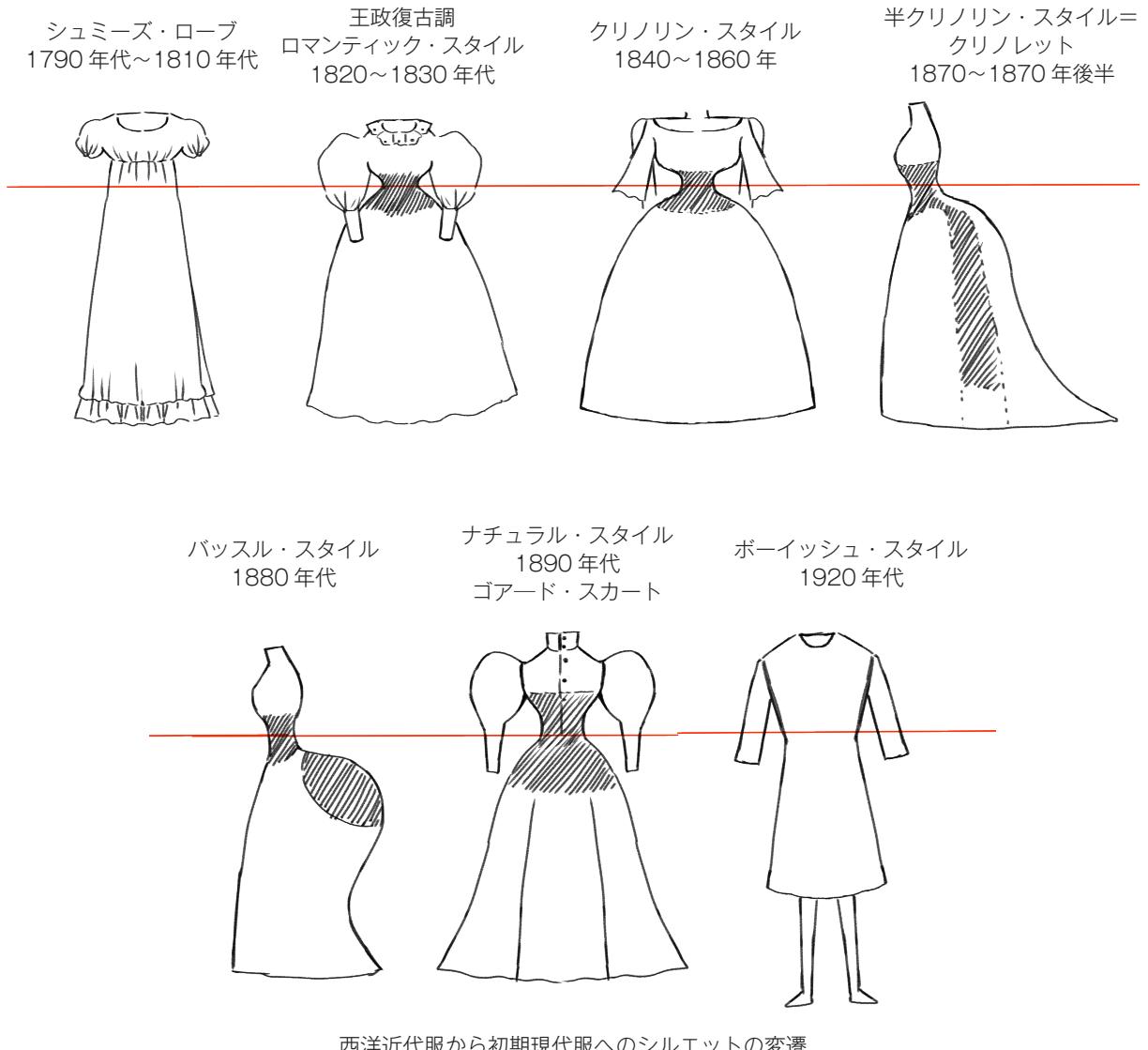
黒ズック布製



ズック布製

丹野都編『西洋服飾史 増訂版』（1999年、東京堂出版）

II 衣服のシルエットと腰枠の変遷 (18世紀末~19世紀末)



01 ロココ調衣裳からシュミーズ型ドレス（ローブ）へ（1790年代~1810年代）⁽⁶⁾

フランス大革命後、パリの婦人たちは、ギリシャ風のイギリス・モードから裸に近い衣裳様式を作りました。それはシュミーズのような衣裳だったため、**シュミーズドレス**と呼ばれました。コルセットと腰枠をつけずに、ときには下着さえ不要とされたと言われています。シルエットはロココ調の細胴・太腰からウェストのほっそりした垂直のスタイルへと変貌を遂げました。まさに衣服革命です。素材はイギリスの産業革命によって生産された薄地綿布の上質のモスリンが愛好されました。

02 ナポレオン帝政期のエンパイア・スタイル (1799年~1817年)⁽⁷⁾

エンパイア・スタイルは、とくにナポレオン1世の宮廷を飾った服飾様式を指します。ドレスの形状は、ハイウェストのシュミーズ型ドレスで、絹サテン地に刺繡が施され、マントーと呼ばれる曳裾^{ひきすそ}が取りつけられた豪華な装いでした。直線型シルエット、大きな衿ぐりと小さなパフスリーブを特徴としました。裾はシュミニーズドレスよりもやや裾広がりとなりました。新型コルセットである綿布製のニノン型コルセットが用いられることもありました。

03 王政復古調衣裳 (1818年~1830年) とロマンチック・スタイル (1830年~1848年)⁽⁸⁾

ナポレオン帝国の崩壊から、フランス7月革命（1830年7月）にいたるまでの間は、フランスをはじめ、ヨーロッパのあらゆる国で反動勢力が増強した時期でした。ルイ18世一家のパリへの帰還（1818年）はフランス革命以前の貴族的要素を、まず、衣裳のうえにもたらしました。女子衣裳における細胴と膨らんだスカートという典雅で豪華な貴族的要素が復活し、袖の脹らみが増してきます。布地は絹の織物が用いられ、裾には装飾が施されます。1818年から1830年には、このような王政復古衣裳が流行します。

ルイ・フィリップ時代には、王政復古調衣裳は、ロマンチック衣裳として結実します。ペルリンという装飾的な衿飾り、ルネサンス期の羊足型の袖以上に膨らんだ袖が大流行し、衣服は、ますます幻想的に形作られ、いわゆるロマンチック文化様式の時代を彩っていました。下揃えには、ペチコートが何枚も重ねて穿かれていました。

エンパイア・スタイルの
シュミーズドレス
(コペンハーゲン国立博物館所蔵)



04 クリノリン・スタイル(1848年～1860年)と半クリノリン・スタイル(1870年～1870年後半)⁽⁹⁾

1848年におけるヨーロッパは革命と反革命の時期でした。フランスでは、ルイ・ボナパルトが皇帝の座につき、フランス資本主義の発展のもとで、産業革命が進みます。第二帝政時代の服飾文化は、ユジェニ皇后を中心として花開きます。

この時代には、再び腰枠を入れて、スカートを脹らます服飾文化が流行します。スカートを拡げる道具はクリノリンと呼ばれ、針金をテープで支えたクリノリン・ペチコートがウェストから吊り下げられて着用され、このペチコートの下には、保温の目的もあって、パンタレツと呼ばれたズボン式のものや、膝丈のズロース式のものが穿かれるようになりました。クリノリンには、種々の種類があります。大型のクリノリンは、1860年代には縮小し、クリノレットと呼ばれる、後ろ半分だけのものになります。

スカートには布襞飾り、房飾り、リボン製の造花など、種々の飾りが、華やかにつけられました。袖も細く長いものから、太く短いものへと気まぐれに変化し、パゴドと呼ばれる、ぴつたりした袖付けから、何段もの布が、塔のように、下開きに重なった袖が、10年間も流行しました。

クリノリン衣裳
(パリ衣裳博物館所蔵)



クリノレット衣裳
(パリ衣裳博物館所蔵)

05 バッスル・スタイルと腰枠の消滅（1880 年代）⁽¹⁰⁾

ナポレオン3世は、第二帝政期のフランスを統治し、産業資本家、農民の幅広い支持で、ボナパルティズムと言われる独裁を行います。その間、クリミア戦争など積極的な対外政策を展開して、国民的支持を受けたのですが、普仏戦争に敗れて、1871年に退位します。

19世紀後半における婦人服は、**バッスル衣裳**と呼ばれました。バッスルとは腰当（英語 bustle、フランス語トゥールニュール tourneur）のことです。これは、スカートのうしろだけを膨らませる道具です。張りのある布を襞どりして、塊のようにまとめた腰当で、ウェストに紐で縛りつけて、上からスカートの布をかぶせて後腰の膨らみを出したのです。

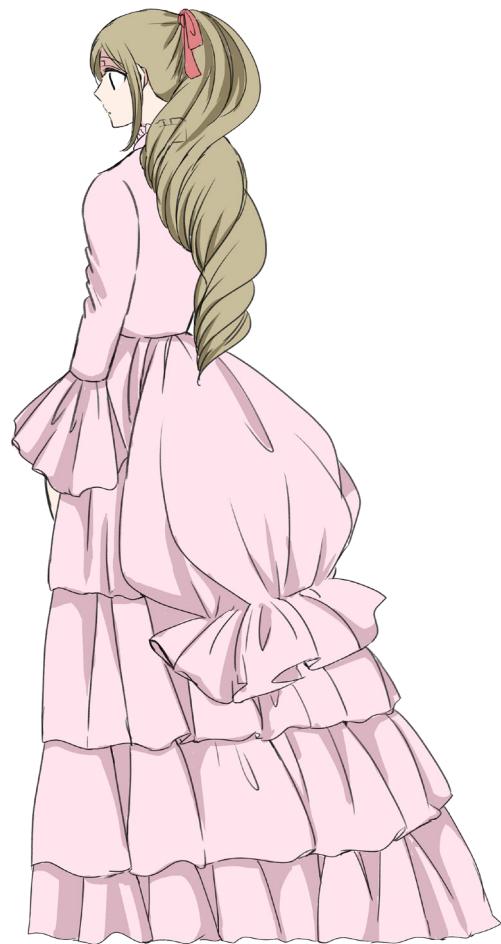
日本には、1883年に建設された鹿鳴館で開催された舞踏会で、婦人たちによって着用されました。この無益な膨らみも近代生活の著しい変化に対応し、1880年ころには姿を消します。

06 ナチュラル・スタイル（1890 年代）から初期現代服へ（1920 年代）⁽¹¹⁾

バッスル・スタイルが1880年代に廃れるとともに、服飾は新しい時代を迎えます。これまで腰枠を用いて体形を衣服によって変化させようとしたのですが、腰枠の廃止によってニューモードが誕生します。スカートは**ゴアード・スカート**と言われ、裁断によってナチュラル・スタイルが

創出されるようになりました。今日の6枚や、8枚はぎのフレヤー・スカートをイメージして下さい。胸から腰にかけて、コルセットでほっそりと無理なく整え、スカートを適度に拡げています。

アールヌーボー（Art Nouveau）と称する「新しい芸術」がヨーロッパを中心に開花し、服飾にも曲線をモチーフとする様式が登場します。胸を突き出し、後腰を膨らませたスタイルは、側面から見るとSの字に見えたため、Sカーヴラインと呼ばれました。このアールヌーボー調のSカーヴのシルエットは、やがて直線型のシルエットへと移行し、スカート丈も短くなり、ボーイッシュ・スタイルが誕生します。初期現代服の誕生です。第一次世界大戦に突入し、女性は活動的な衣服を着て、社会に進出することになります。



バッスル衣裳
(パリ衣裳博物館所蔵)

女性はいつから、どこでズボンを穿き始めたのか？

III ドレス・リフォーム運動⁽¹²⁾

イギリスを初めとするヨーロッパの人々は、17世紀にヨーロッパから移住してきて、アメリカ大陸に植民地建設を行い始めて以来、ヨーロッパの貴族の服飾への強い憧憬の念をいただき続けてきました。フランス革命期のシュミーズ型ローブの登場は、口ココ調の拘束的な衣裳様式に対する反目から生まれ、コルセットから解放された動きやすい衣裳様式がありました。アメリカでも、この自由で動きやすいローブが取り入れられるのですが、それも束の間、19世紀前半に、再び拘束的な衣裳が復活し、コルセットを装用したきつい紐締めによる拘束的な衣裳は、女性の健康、生まれてくる乳児の健康を蝕んだのです。

19世紀のニューヨーク・ファッションは、基本的にはパリ・モードがありました。ニューヨークでは、ヨーロッパから導入されたハイウェストのエンパイア・ドレスに始まり、ロマンチック衣裳、クリノリン衣裳、バッスル衣裳といった拘束的な衣裳が流行していました。このようなパリ・モードの華やかなりし時代に、他方において、以上のような拘束的な衣裳様式に抗して、1824年から1920年にかけて、ニューヨークとその周辺においてドレス・リフォーム運動が興されました。すなわち、インディアナ州のニュー・ハーモニー共同体、ニューヨーク州のオナイダ共同体、その他のユートピア共同体において、ドレス・リフォーム運動が興り、衰退していったのです。今日では、女性がズボンを穿くのは、国際社会における当たり前の文化となっています。ですが、このような文化が服飾の歴史において定着したのは、さほど昔のことではありません。

さて、それでは女性はいつから、どこでズボンを穿きはじめたのでしょうか。19世紀前半のアメリカに起きた「ブルーマー運動」と呼ばれるドレス・リフォーム運動は、よく知られています。ブルーマーは、我が国では、一時、女子生徒の体操服として普及しました。19世紀アメリカにおける女性のドレス・リフォーム研究を行っているアメリカの服飾研究者ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャー女史は、既存のブルーマーリズム研究を再検討し、19世紀アメリカにおける女性のドレス・リフォームを一期 1824~1851 年、二期 1851~1879 年、三期 1879~1920 年に区分して、新しい研究を行っています。

我が国ではブルーマー運動に関する研究は行われていますが、その他の 19世紀アメリカにおけるドレス・リフォーム運動に関する研究は皆無です。濱田の『パリ・モードからアメリカン・ルックへ』では、資料的価値の高い第一次資料の文書の紹介・分析を通じて、ドレス・リフォーム運動の本質に多少とも触れることができたところに、筆者のオリジナリティがあるものと確信します。紙の本も電子書籍もアマゾンから販売されています。

※本項目では、濱田雅子著『パリ・モードからアメリカン・ルックへ—アメリカ服飾社会史近現代篇一』（株式会社インプレス R&D POD 出版、2019）のはじめにの一部を書き換えて紹介しています。本書はネクパブ POD アワード 2022 受賞作で審査員特別賞を授賞しています。

ブルーマー衣裳の女性



IV 働く人々の仕事着をイラストに描く！

庶民の衣服⁽¹³⁾

著者は上流階級の服飾だけではなく、中産・下層階級の衣服も研究しています。ここでは、P・F・コーブランド著、濱田雅子訳『図説 初期アメリカの職業と仕事着』(悠書館、2016)の再版にあたっての部分を紹介させていただきます。本書では、以下の職業着をユーモラスなイラスト入りで考察しています。

船乗りと漁師、農民と農村労働者、職人と都市労働者、商人と行商人、フロンティア開拓者、輸送労働者、公僕、正規軍と民兵、知的職業人、使用人、年季契約奉公人と奴隸、犯罪人、民族に固有の服装。今日のイラストレーターや映画監督の方々にとても役立ちます。本書は、第16回日本風俗史学会研究奨励賞を受賞しています。

「著者のP・F・コーブランド（1927～2007）の専門研究分野は、初版のあとがきでも述べたが、アメリカ独立革命やカリブ海の海底研究や18～20世紀の軍服や市民服に関する分野である。元はアメリカ合衆国ワシントンD.C.のスミソニアン協会の歴史関係の主任イ

ラストレーターをつとめておられた。同協会退職後、アメリカ史に関するフリーのイラストレーター、ライター、コンサルタントとして活躍されて、論文や専門書の他、子ども向けの絵本41冊を精力的に出版してこられたが、2007年12月8日、享年81歳で肺癌のため亡くなった。

さて、再版に至った本書の面白さは、何であろうか。

原書のタイトルから明らかなように、本書はアメリカの植民地時代から独立革命期の100年間にわたる職業着を扱っている。だが、実際には18世紀アメリカの労働者階級が身に纏っていた衣服の遺品は、ほとんど皆無に等しく、その上、植民地アメリカの一般大衆は、その時代に描写されないまま、歴史から消えてしまったのである。そのため、著作にまとめるには大変困難な資料状況にあった。にもかかわらず、本書には、1710年から1810年までの100年間にわたって、欧米で労働に携わっていた人々が着用していたと推察される職業着が、歴史的背景や彼らの生活状態とともにビジュアルに描かれている。パラパラと本書をめくっていただくと、様々なスタイルで労働に携わる思い思いの表情の人々が登場する。眺めているだけでも想像力をかき立てられて、読者は思わず、本書に描かれた世界にいざなわれるであろう。」



イチゴ売りの少女

P・F・コーブランド著
『図説 初期アメリカの職業と仕事着』p.107

参考文献

- ① 丹野郁編『西洋服飾史増訂版』（東京堂出版、1999）品切れ重版未定
- ② 丹野郁編『西洋服飾史図説編』（東京堂出版、2003年）
- ③ 濱田雅子著『パリ・モードからアメリカン・ルックへ—アメリカ服飾社会史近現代篇一』（株式会社インプレス R&D POD 出版、2019）
- ④ P・F・コープラン著、濱田雅子訳『図説初期アメリカの職業と仕事着』（悠書館、2016）
- ⑤ 濱田雅子著『濱田雅子のアメリカ服飾史著作集カタログ』（NextPublishing Authors Press 発売日 2023年10月24日）

※①②は古書でも入手できます。故丹野郁博士は、フランスのソルボンヌ大学で服飾史学を学ばれ、日本に西洋服飾史を導入された、この分野の第一人者です。本書には、丹野博士がフィールドワークで、フランスの衣裳博物館やイギリスのヴィクトリア・アルバート博物館やデンマークのコペンハーゲン・国立博物館などで、衣裳の実物を取材されたカラー写真が満載です。ぜひ、①と併せてお読みになり、手に取って、貴重な写真の数々をお楽しみ下さい。濱田は、長年に渡って、丹野博士を師事して参りました。

典拠

| | |
|--------------------------------------|----------------------------------|
| (1) 文献①, p.107, 第199図 | (8) 同上, pp.164-174. |
| (2) 同上, p.136, 第276, 277図 | (9) 同上, pp.177-186. |
| (3) 同上, pp.158-159. | (10) 同上, pp.188-191. |
| (4) 同上, p.185, 第407図, 文献②, p.98, 27図 | (11) 同上, pp.191-192, pp.196-217. |
| (5) 同上, p.203, 第444, 446図 | (12) 文献③, pp.3-5. |
| (6) 同上, pp.146-147. | (13) 文献④, pp.263-264. |
| (7) 同上, pp.151-152, 文献②, pp.84-85. | |

※本PDFのイラストは、所蔵品の写真からホビージャパン技法書編集部が描きおこしたものになります。

ロマンチックなドレスの描き方

ドレスの構造からデザイン・バリエーションまで
おまけ特別版

著 濱田 雅子 (はまだ まさこ)

スタッフ

編集 沖元友佳 (ホビージャパン)

イラスト ホビージャパン技法書編集部

本文デザイン・DTP 甲斐麻里恵

2024年12月27日発行

©Masako Hamada/HOBBY JAPAN

Not for sale. Repost is prohibited.



※当PDFは、ホビージャパン刊『ロマンチックなドレスの描き方 ドレスの構造からデザイン・バリエーションまで』(ヘラ著 濱田雅子監修) のおまけPDFとなります。

